

はじめに

『何か毎日同じことの繰り返し…何かやらなくちゃ』このことが常に私の頭の中であった。この考えを何回もったことだろう。いつごろからもっていたらう。しかしこのような思いを抱いてながらも実際に行動に移すことはなく自分に愛想をつかすことの繰り返しであった。そしてそんな気持ちを高校生の頃から抱きつつ大学受験を終え大学生活が始まり、飲み会ばかりの生活が始まり、気付けば大学2年生になっていた。そろそろ自分に愛想をつかすのではなく、そんな自分を受け止め変えていかなければと思った。

国際交流についても興味があり、『NGO・NPOの社会学』を履修した私は、運命的に必然的にも山田先生に出会った。そして先生は、インターバンドのカンボジア総選挙監視ミッションについて授業で紹介をした。この話を聞き興味をもった。そしていつも興味を持つことだけで終わる自分を変えるいい機会だと思った。このような意で私はこのミッションに応募した。

『自分を変えたい』そんな動機で応募した私は正直『カンボジア』という国に対して、まして『選挙』に対してほとんど興味がなかった。自分が滞在する国ということもあって『カンボジア』という国に対しては多少は調べたが深い歴史に調べるまでには至らなかった。『選挙』に関してはもっとひどいもので日本でも有権者でない私が『選挙』についてどう考えればいいのか？と思い、プリーフィングを終えてもまだ私はほとんど興味をもつことができなかった。

しかし今の私は全く違う。『カンボジア』という国の発展を願い、今後を見守り、携わっていきたく思っている。日本での生活に戻った私は今の自分の生活に感謝すらしている。19歳という日本では選挙権のない私が今凄く『選挙』の大切さ、意義について考えている。友達に訴えかけている。私は10日間ほどのミッションの日々でここまでの心境の変化があった。

政治的見解やカンボジアの国のこれからについてこの選挙がどう影響したかとか、するどい見方はできない。19歳の私から見た独特な視点になるが私に深い刺激を与え心境の変化をもたらしてくれたミッションの日々をこれから書いていきたいと思う。

任地先での活動

山田先生を含めた学生チームはプノンペンから1時間ほどのコンポンスプーという州で活動を展開した。コンポンスプーに着いてすぐに私は衝撃を受けた。通訳の人々の今回の選挙に関する見解を聞いていたのだがカンボジアという国の人々の選挙に対して熱い思いでいることを知った。1つ気になったことは彼らは口々に『VOA』というアメリカが発信しているラジオの情報のことばかり話していたことである。『VOA』の情報だけを自分の投票の判断材料にしていることが怖いと思った。色々な情報を入手できる日本とは違い、ある、限られた範囲での情報しか入手できないのもまた問題であると感じた。

彼らに話を聞いた次にCOMFRELに話を聞いた。コンポンスプーは比較的平穏な場所ということもあって目立ったことも起きてないとのことだった。

翌日、私達はコンポンスプーの第三副知事にお話を聞いた。ここでもまた目立ったことは起きてないとのことだった。第三副知事の印象としてはやはり庶民とは違う風貌だった。第三副知事にお話を聞いた後、DDRのご家族を訪問したので第三副知事の庶民とは違う風貌という印象はいっそう増した。この国ではお金の配分が全くうまくいってないことを実感した。といっても州舎は日本と比べたらすごく貧相な印象を受けたが。次に地元のNGOでお話を聞いた。ここではハンディキャップの人がどのような処置を受けられるのかということを中心に伺った。ハンディキャップの人の家族は助けることが出来なく投票所のスタッフが手を差し伸べるとのことだった。そこらへんの対応がしっかりできているかどうかしっかり監視しようと思った。

そして7月25日。キャンペーンの最終日である。プノンペンからコンポンスプーに行く道で今までで一番多くキャンペーンカーを見た。大多数の政党のキャンペーンがトラックの荷台に大勢の支持者を乗せて街を廻っているものだった。初めてカンボジアの選挙キャンペーンを真の当たりにした私は、すごく小さな子供なども乗っていてなんだか訳も分からず乗っていたり、若者においても強制的に押し付けられている感を感じた。この日は早朝にPECを訪れた。私達が質問することに資料を持ち出し正確な数字を提示してくれたのですごく誠実さを感じた。と同時に『国際選挙監視』という責任の大きさを痛感した。

次に訪れたCECでも私達が質問することに懸命に答えてくれ、自分が日本からカンボジアに来た責任の重さを感じた。このような出来事を通して私の中での国際選挙監視員としての意識はいっそう、そして大幅に変わっていた。

19歳、初めての選挙 —quiet day*polling day*counting day—

7月26日からは実際に各投票所を廻り活動をした。言わば、明日の投票日に廻る投票所の下見である。19歳の私は日本の投票所にも行った経験がないので本当に初体験ゾーンであった。投票に行ったことがある人からは普通のことかもしれないが全てが新鮮であった。この日、各投票所を廻り1つ大きな問題点と感じたことは、翌日が投票日だというのに投票準備がなされていないことだ。投票所のchiefによって投票所の雰囲気も違って、しっかりとしたマニュアルがないのだと感じた。各々バラバラなことをしていたのでしっかり定める必要はあると思った。

このような問題を残しつつ、投票日を迎えた。私はチョンボ primary school で opening ceremony を見た。投票所のchiefは、政党代表者に、国際監視員の私たちに投票箱などをしっかりと見せてきた。投票所を廻っていて、登録者カードが見ずらくてトラブルがいくつか起こってはいた。登録者カードの見ずらさは次回に改善を求める。字の読めない人も多数いるので補助員なども必要だと感じた。投票日までの連日、大雨が降り続いたということもあってアクセスが難しい場所もあった。これでは投票したくても出来ない人もるように感じた。いくつかの問題点は感じたものの違法までいくものはなかった。投票日全体の印象としては朝早くから、まるでお祭りがあるように地域の人が集まっていてこの国の選挙に対する関心の深さを痛感した。なかには私と同年代の子も多数いてなんだかすごく考えさせられた。

投票日が一番厳しい日になると予想していたのだが、意外や意外、最も厳しかったのがこの日。7月28日の開票日である。3投票所の投票用紙を一緒にして開票していくシステムであった。一枚一枚、投票所のchiefの人が政党代表者と私達、国際監視員に見せていた。私が疲れて気を抜けてしまうことがあるとchiefに伝わり、chiefも投げやりになりそうな感があった。ここでもまた自分達の責任の重さを感じた。開票はほぼ一日を費やした。

これからの自分

カンボジアという国はまだまだ発展する必要があることがたくさんあり、余計に政治に対する関心が高いのだと思う。一人一人が政府のあり方についてビジョンをもって投票にきている。でもそこには複雑な心境も含まれていて、変化を求めるが急激な変化は自分の生活を脅かすものとなる。このような葛藤があるなか人々は自分達の国の明るい未来を望んで投票にきている。

10日ほど滞在していてカンボジアでの生活は日本に比べたら快適でもないし、貧相だと思った。でも働く人は日本人よりも一生懸命な印象をもった。今はまだ明日の生活が暗く感じるかもしれない。しかし長い目を見るとこの国はすごく魅力的だと思う。ある程度、かたちにはまってしまった日本と比べて、変わる事の出来る道はたくさんあるのだ。たくさんの選択肢がある分、波乱もたくさんあるだろう。でもそんな波乱を乗り越えてこの国が素晴らしい国になっていってくれることを願いたい。

カンボジアのことを日本に比べたら快適でもないし、貧相でもないなどと言ってしまう自分、比べてしまっている自分・・・日本に帰ってきてすごく贅沢者だと思った。しかし逆に言えている自分、比べている自分、そんな環境に私は感謝をした。今の日本に満足などはしていない、まだまだ不満はある。そんな不満を自分の一人の一票ではどうすることもできないなどと考えないで、確実に明日の自分の生活につながっていると考えたい。選挙というものが政治にそして自分の生活につながっていることをこの選挙監視を通して学んだ。そして選挙というものが直接国民の声を反映するすごく大切なものだということ。すごくすぐ当たり前のことかもしれない。しかしそんな当たり前のことが私の世代では通用しない。私もこの経験をしなかったら気付かなかったと思う。私はこのミッションを通して学んだことを周りの世代に伝えたい。

このミッションを通じて、今の自分の生活に有り難さを感じ、今まで考えたことのない選挙について政治について考える機会をもらった。自分が日本人として国際人の代表であることも実感することができた。自分に愛想をつかさないでよかった。ここで満足するのではなくこれからも国際人として役立つことをしていきたいと強く思った。